会　議　録

１　会議名

令和８年度上越市総合教育会議

２　議題（公開・非公開の別）

教育における生成ＡＩ活用の在り方について（公開）

３　開催日時

令和８年10月28日（木）午後１時30分から14時40分まで

４　開催場所

上越市役所木田第一庁舎４階　401会議室

５　出席者（敬称略）

・構 成 員：小菅上越市長

上越市教育委員会

佐藤教育長、大谷教育長職務代理、小林委員、鈴木委員

・市長部局：中澤総務部長、森田総務部参事（総務課長）

・教育委員会事務局：宮下教育部長、五十嵐教育委員会事務局参事、笹川教育委員会事務局参事（教育総務課長）、廣川学校教育課長、加藤学校教育課参事

６　発言の内容（要旨）

（１）開会（総務部長）

（２）市長挨拶

（３）協議

・テーマ：教育における生成ＡＩに在り方について

①　生成ＡＩがもたらす日常生活への変化と今後の期待と課題

【小菅市長】

本日の会議は、市と教育委員会が今後連携して取り組んでいくためのきっかけとしたい。

生成ＡＩの進展は、うまくコントロールして活用すれば、人類や教育に大きく役立つ可能性がある一方で、危険な側面もある。

行政においては事務効率の向上が期待できる。また、人口減少という課題に対しても、フィジカルＡＩなどの活用により大きな効果が期待できる。研究分野では、長年解決できなかった数学の問題が短期間で解かれた事例もあり、大きな可能性を感じている。教育や研究においても活用の余地は大きい。

一方で、人類のコントロールを超えてしまうことへの懸念もある。サイバー犯罪などへの悪用も考えられる。ＳＦのような話ではあるが、人類を破滅させる可能性すらあるとの考えもあり、その危険性は決して無視できないと思っている。

【大谷委員】

現在のＡＩの発達は、これまで経験したことがないほど急速である。１年前まではプロンプトを作り込むことが重要であったが、現在はプロンプトに頼らなくても様々な出力が可能となり、ＡＩが自ら判断するエージェント型へと進化している。

歴史的に見ても多くの技術は軍事利用から発展してきたが、現在のＡＩの進歩はそれだけでは説明できない速度で進んでおり、脅威に感じている。日々報道されているサイバー攻撃なども、ＡＩがなければ起こり得なかったものがあるのではないか。

仕事では非常に便利である一方、自分で考える機会が減っていることにも危機感を持っている。今回の会議に当たりＡＩに原稿を作成させてみたが、どこかしっくりこなかったため、自分で作成することにした。

また、ＡＩに「発展によるメリットとデメリットのどちらが大きいか」と問いかけたところ、全体としてはメリットが上回るが、その恩恵と不利益は社会の中で不均等に分配されているとの回答であった。二極化が進んでいるということであり、おおむね納得できる内容であった。

【鈴木委員】

私もＡＩに問いかけてみたが、ＡＩの発達に対しては肯定的な回答だった。会議には自分の言葉で参加したいと考え、自分で整理してきた。

現在、身近なところでは子どもの偽画像やフェイク画像の拡散、他人の写真の無断利用などが問題になっている。学校で撮影した写真を他所に転送する家庭もあり、学習以外の場面での利用も広がっている。子どもたちは技術を使いこなしている一方、大人が十分に対応できていない面もある。

また、ＡＩチャットへの相談も気になっている。ＡＩは利用者に寄り添った言葉を返すため、友人や家族ではなくＡＩに依存してしまう可能性がある。ＡＩの回答を絶対に正しいものとして受け止め、心理的に依存してしまうことが怖い。身近な人へ相談する機会が減ることも懸念している。

もちろん、適切に活用できるのであれば有効な面もあるが、依存につながることには危

険性を感じている。

【小林委員】

数か月前から有料版のＡＩを利用している。大学で授業を担当しており、次期学習指導要領に関するスライド作成を依頼したところ、短時間で分かりやすい資料ができた。発問例や宿題の提案まで行ってくれた。

非常に便利だと感じる一方で、自分で資料を読み込み、整理し、学生の顔を思い浮かべながら教材を作成する過程で培われてきた力を今後どこで養うのかという不安もある。

現在のＡＩはまだ自律的な存在ではないが、将来的には自己学習を行うＡＧＩ（汎用人工知能）や、人間の知性を超えるＡＳＩ（人口超知能）へ発展する可能性がある。教育分野においても、そのような未来を見据えながら考えていく必要がある。

便利さを認めつつも、子どもたちの健全な発達を守るという視点を忘れてはならない。

【佐藤教育長】

子どもたちは日常的に膨大な情報に触れながら生活している。その中には信頼できる情報もあれば、そうでない情報もある。どれが正しい情報なのか分からないまま過ごしていることに不安を感じている。

大人以上に多くの情報を受け取っている子どもたちに対し、学校教育がどのように対応していくべきかを考えているところである。

【中澤総務部長】

大谷委員や鈴木委員が「しっくりこなかった」と話された点が印象に残った。違和感を持てるうちは良いが、その感覚がなくなったらどうなるのかという不安がある。

行政においてはＡＩが出した答えの正誤を判断できる人材をどう育てていくかが重要な課題である。ＡＩは便利だが、市民のための仕事を担う行政職員として、それだけに頼ってよいのか考えさせられる。

【宮下教育部長】

災害時にはフェイク動画が多数拡散される。本物と偽物の区別が非常に難しくなっており、何を信じればよいのか分からない状況になっている。

【鈴木委員】

偏った情報の中で正しい判断をすることがますます重要になっている。フェイク動画などの問題に対応するためにも、大人自身が知識を身に付けなければならない。

【大谷委員】

現在は本物と偽物の区別がほとんどつかなくなっている。交通事故のドライブレコーダー映像ですら改ざんされる可能性がある。

悪意を持って情報を流す人を無くすことは難しい。人間であれば断定を避ける場合もあるが、ＡＩは誤っていても断定的に回答することがある。

【小林委員】

問題点は実際に使ってみて初めて見えてくる部分もある。まずはＡＩについて知ることが大切である。

経済産業省などの調査でも、日本はＡＩ利用率が低い傾向にある。また、子どもたちへの予備調査でも、「まだ利用したことがない」と回答した割合が多かった。

まずは活用し、その上で見えてきた課題について様々な立場から議論していくことが重要である。

②　学校教育における生成ＡＩとの関わり方

【小菅市長】

生成ＡＩを適切に活用できる人材を育成することが重要である。ＡＩは間違った情報を出力することもあるため、不確かなものであることを理解した上で活用できる判断力を身に付ける必要がある。

また、人間性を育む教育は今まで以上に重要になる。音楽や芸術、スポーツ、他者と協調する力など、人間らしさに関わる部分を大切にしていかなければならない。ＡＩの活用が進み、人間が働かなくてもよい時代になったとき、人間は何のために生きるのかという根本的な問いにもつながってしまう。

【小林委員】

ＡＩ時代においては、人間性をどう育てていくかを教育の中心に据える必要がある。

先進的な学習塾では、一斉授業型から個別最適化された学習へ移行している。ＡＩが一

人一人の学習状況を分析し、その子に合った問題や宿題を提示する。回答が進まなかったり連続して誤答したりした場合には講師へ通知され、講師は励ましや助言などのコーチングを行っている。

ＡＩがティーチングを担い、人間がコーチングを担う方向へ変化していると感じる。一方で、子ども同士の関わりや、そこから生まれる感情の学びは失われやすい。そうした機会を教育の中で意図的に残していくことが重要である。

【鈴木委員】

写真を撮るだけで調べることができるなど、便利な面は多い。しかし、読む、書く、考える、記憶する、判断するといった認知発達にとって大切な経験が減ることには不安を感じる。

小中学生の時期は、五感を使いながら物事を考え、知識や経験を積み重ねることが重要である。本来必要な経験の機会が減ることは望ましくない。

また、ＡＩに頼り切ることで、悲しみや怒り、感動といった感情を経験する機会まで減ってしまうのではないかという懸念もある。調べること、失敗すること、苦労すること、友達と意見を交わすこと、先生や親へ相談することなどの経験が、自己選択や自己決定につながる。自分で考え、人と関わりながら成長する機会を大切にしてほしい。

【大谷委員】

ＡＩの活用には、個別最適な学びや多様な学びへの対応など大きなメリットがある。また、教職員の負担軽減につながり、本来業務である子どもと向き合う時間を増やすこともできる。

一方で、現状では学校現場におけるデメリットの方が大きいのではないかと思っている。判断力が十分に育っていない子どもに対して、ＡＩの危険性を理解させることは非常に難しい。学校で利用を制限しても、家庭で自由に利用できれば意味がない。保護者も巻き込みながら、メリットと危険性の両方を理解した上で利用を進める必要がある。ゲームやスマートフォンの利用と同様に、大人であればある程度判断できるが、子どもはまだ難しい。だからこそ大人が一定の制限を設けることも必要である。

【小菅市長】

子どもに危険性を十分理解させることは難しいため、一定の制限が必要ではないかとい

う意見であった。皆さんはどう考えるか。

【佐藤教育長】

スマートフォンが普及し始めた頃にも同じ課題があった。学校ではルールを定められても、家庭へ帰れば自由に使える状況だった。

生成ＡＩについても、学校だけで完結するものではない。学校教育へ取り入れていくに当たっては、スマートフォンのときの経験を踏まえ、保護者や家族にも十分説明し、理解を得ながら進めていく必要がある。

【小林委員】

ＯＥＣＤ生徒の学習到達度調査（ＰＩＳＡ）では、日本の子どもは「早く答えを得たい」「楽に結論を得たい」と考える傾向が見られる。また、つまずいた際に誰かに助けを求める割合も高い。一方で、「十分に考えてから助けを求める」と回答した割合はＯＥＣＤ平均を下回っている。ＡＩを活用するにしても、考えることをやめさせないための道具として利用するという視点が重要である。また、家庭で学校や教育について話し合う割合もＯＥＣＤ平均より低い。ＡＩの普及によって家庭内の会話が減ることがないよう、体験活動や読書、人との交流を意図的に増やしていく必要がある。

家庭・学校・地域が同じ方向を向きながら子どもを育てていくことが、これまで以上に重要になると思う。

【鈴木委員】

子どもたちはＡＩを使いこなしていくが、保護者は実態を十分に把握できていない。

大人は個人情報を入力してはいけないと理解しているが、子どもは自覚なく自分の情報を入力してしまうことがある。顔写真や風景写真から場所が特定される可能性もある。

学校でも指導しているが、自分事として捉えられていない子どもや保護者も少なくない。保護者への理解促進も必要だと思う。

【大谷委員】

ＰＴＡ活動をしていた頃から感じていたことだが、本当に情報を届けたい層ほど研修会や説明会に参加しない傾向がある。

ＳＮＳの危険性を伝える際もそうであった。ＡＩについても同じ課題があり、どうすれ

ば本当に伝えたい人へ情報が届くのかが難しい。

また、人間同士の関わりによって成り立っている仕事や社会が、ＡＩによって機械的なものになってしまうことも心配している。だからこそ子どもたちには、人間として大切なことをしっかり学んでほしい。

【佐藤教育長】

教育を進める上では、不易と流行のバランスが重要である。生成ＡＩは教育活動における道具の一つでしかない。

ＡＩだけで学びが完結してしまうことを避けなければならない。読解力の低下が指摘されているが、ＡＩが行った作業を自分の力だと思い込んでしまう危険性もある。

改めて教科書を大切にした授業づくりが必要である。教科書を使って面白い授業ができる教職員を増やしていくこと。教科書を使いながら、ＡＩも活用し、自分の考えを整理していく授業を行える教職員を育成していくことが教育委員会の重要な役割だと考えている。

【小林委員】

かつて大手町小学校が豪雪を題材とした総合学習に取り組んだ。子どもたちが地域を回り、被害状況を調査し、その結果から雪国で暮らす意味を考えていった。文学作品や雪の結晶の学習にも発展し、最終的には作品としてまとめ、多くの反響を得ることができた。非常に感動的な学習であった。

もしＡＩを活用するのであれば、探究のためのヒントを得ることはできる。しかし、最終的に考え、判断するのは子ども自身でなければならない。学習を方向付けるのは教師の役割である。

ＡＩ、子ども、教職員がうまく連携できれば、より豊かな学びにつながる可能性がある。そのためには教職員研修とともに、保護者にも学ぶ機会が必要である。

【大谷委員】

教育は人を育てることであり、効率化だけを追求してはいけない。

ＡＩで答えを出せば早いかもしれないが、それでは子どもの成長につながらない。子どもたちには一定の制限も必要だと思う。

一方で、教職員の業務についてはＡＩを活用し、そこで生まれた時間を授業づくりや子どもと向き合う時間に充ててほしい。

【鈴木委員】

教科書を使うことには賛成である。読書離れも進んでいる中で、教科書に触れる機会は大切であり、教科書には書き込みができるという良さもある。タブレットやＡＩも活用しながら、紙の教科書も大事にしてほしい。

【五十嵐教育委員会事務局参事】

若手教職員向けの研修で、「ＡＩ時代に子どもから奪ってはいけない学ぶ権利は何か」というテーマについて話し合った。その中で若手教職員から、「迷う権利」や「間違える権利」が大切ではないかという意見が出た。人間は迷ったり失敗したりしながら成長する。そうした機会を意図的に残していく必要があると感じた。

【小林委員】

幼児期から小学校低学年までは、ＡＩや電子機器がなくてもよいのではないかと思う。対話や交流、自然体験、社会体験を大切にする時期である。

中学年以降は大人と一緒に使い、中学生では批判的に、高校生では客観的に活用できるようにするなど、発達段階に応じた育成プログラムを示していく必要がある。

【佐藤教育長】

市内では清里中学校が県立教育センターの指定を受け、生成ＡＩを活用した授業実践の研究を進めている。

【加藤学校教育課参事】

清里中学校では、探究的な学びにおける生成ＡＩの活用について研究を進めている。社会科の授業では、自分の考えをまとめる際にＡＩを活用し、壁打ち相手として利用しながら考えを深めている。最終的にはグループで発表しあい、自分の考えを広げることを目指している。

導入に当たっては、ＡＩを使われる存在ではなく使いこなす存在になることを目標に掲げ教室に掲示するなどし、利用上のポイントを事前に指導している。

【佐藤教育長】

実践はまだ始まったばかりである。学校の中で約束事やルールを共有しながら進めている。今後は保護者も巻き込みながら、家庭にもルールや考え方を広げていくことが大切である。清里中学校の取組にも引き続き注目していきたい。

【小菅市長】

家庭を巻き込むことの重要性や、発達段階に応じた活用の必要性は共通した認識であると感じた。

また、教科書を中心とした授業づくりを基本としながら、ＡＩは考えを深めたり整理したりするための補助的な役割として活用することが重要である。教職員についても研究と成長が求められる中、清里中学校の実践も参考になると感じた。

【廣川学校教育課長】

貴重な意見をいただき感謝している。生成ＡＩを巡る環境変化は非常に速く、子どもたちもその影響を受けている。本日いただいた意見を学校現場とも共有し、今後の指導や教育活動に生かしていきたい。

４　その他

なし